

としての覚書」とありますように、「おふでさき」の言葉は「場」（場面、環境、条件）において話され、その構成する「話し手の立場」「表現の手段＝指示」「指示の仕方」の三つの要素を分析し、そこに現れてくる道筋を秋からにすることが、解釈にとって大切であることを示しました。この論文の最後を、「悟り」で締めくくっています。「人間の『理解への努力』をさとりと仰せられているようである」（35頁）と述べ、「さとり」にも筋道があり、その筋道が「理と言われているものではないだろうか」と仰せになっています。これに関連して先生は、よく「論し、悟り」を強調されておりました。この「論し」については、『天理教論叢』（第3、6、7号、昭和36、40、41年）に「おさとしの研究」の論文がありますのでご参照いただきたい。

「区分より解釈へ」（『天理教学研究』第12号、昭和31年）では、竹村菊太郎『おふでさきのてびき』（天理教道友社、道友文庫2、昭和28年）によりながら議論を進め、「お歌を区切って、そこにお歌の群を一つのまとまりあるものと考え、理解に必要なことである。しかし、一つのまとまりあるものを捉えるということが先にできて、はじめて、区分ができるのである。」（23頁）と主張し、まとまりを、「このはなし」「たとえの問題」「例話と史実」「話題」などと区分して、これが解釈につながっていくというのです。「反復と展開」（『天理教学研究』第16号、昭和42年）では、「おふでさき」の中に、話題が繰り返し出てくる場合がありますが、それは単に繰り返されているのではなく、話題が次第に展開していつているというのです。

先生は、「おふでさき」の一連の研究を「おふでさきの教理体系についての覚書」（『天理教校論叢』第10号、昭和46年）に纏められています。この中で、「号別大意」と「教理体系」は省略されていますが、「号別大意」は、『天理青年教程二十四号』天理教青年会本部出版部、昭和51年）に、「教理体系」は、先にあげた『おふでさき通訳』に、見事に集約されていると思います。先生は、『おふでさき通訳』について「自著を語る」のコラムで、『おふでさき』は、忘れるから、書かれたと言う。このような重要な事柄が忘れられてきたとい

うなら、これを『おふでさき』に求めなければならない。『おふでさき』には、これらの事柄について、明確な教えが書き残されているのである。（『みちのとも』昭和57年1月号、53頁）と述べておられます。私はこの書について、「読む進むにつれ、お歌一首一首があるべきところにあるという実感と、謎解き、暗号解読のよう面白さを感じる。今や本書によって意味の理解がなされたので、意図の理解としての『論』が展開されることを期待するものである。」（『あらきとよりよう』126号、天理教青年会）と述べた。先生は、先の戦争で、暗号解読に従事したと語っておられました。シュメール語の解読と同じように、深い洞察と全体を俯瞰できる力が感ぜられます。

私は、『おふでさき講座』が出版された後お宅に呼ばれ、お食事を頂くことになりました。その折、「先生はこれまで研究を進められてきて、「おふでさき」についてはほとんど理解されたのでしょね」と質問を致しました。すると先生は、暫し考えられて、「いや、7割は理解できているが、まだ3割は理解できない」と仰った。『おふでさき通訳』が出版された折、同じく食事の接待に与り、「先生は、以前、3割は分からないと仰っていましたが、今度は、いかがですか」と伺うと、即座に「5割は分からなくなりました」と。先生の「おふでさき」にかけの思いの深さを知る思いでした。

後年、『風の心 私のおふでさき入門』（教養ブックス10、天理やまと文化会議、1993年）が出版されました。「私」（芹澤先生ご自身およびこれまでの見解）と「風」（神様の言葉、先生の悟り）との対話として話が進められています。その中で、「わたしの読み方には、どうも、かなり足りない所があったように思う。それは、「おふでさき」は教理を書いてある本であるのみ見る見方、すなわち教理的な理解に偏りすぎていたことである。散文と詩の区別は心得ていたつもりであったが、和歌が唄（うた）であることを忘れていた。」と吐露していることに応えて「風」は、「あなたは、「おふでさき」を詠むということは、親神さんと対話することである、ということをお忘れいただけます。だからこそ、「おふでさき」の言葉を読ませて戴くということは、親神さんと対話することなのです。お歌のお言葉は、芝居で言えば、神様の科白（せりふ）です。神様の仰有（おっしゃ）っている言葉を、歌の理で歌わせて貰い、読ませて貰うのです。ですから、どこを読んでも、そこに神さんとの出会いがあります。」（330～331頁）と応えています。私も、心したいところです。

芹澤先生には、このほか、「おさしづ」の「事情さとし」などに健筆を振るわれましたが、殊に『天理教事典』の初版の時には、教語のかなりの部分の執筆と、索引作りには、ひとりで携わって下さいました。『ギリシャ語入門』の「語彙索引作り」の経験が役に立ったと語っておられました。今は、親神様の懐に抱かれていることと思いますが、先生の一刻も早い生まれかわりを願っております。



芹澤茂先生（最前列、左端）1991年